

陳述書

2025 年 10 月 7 日

住所



署名



1 提訴をしてから約2年間が経ちました。この間に私が考えてきたこと
をお話しいたします。

2 まず率直な感想として、この国では「子どもを産まない女性」は想定
外の存在なのだというのを改めて感じました。とりわけ、不妊手術を
行うことで女性が「後悔」という国の言い分に強い憤りを覚えました。
私はメリットとデメリットを十分に熟慮した上で「子どもを持たな
い生き方」を選びました。その意思を身体に刻み込み、妊孕性を持つ自
分の身体に対する嫌悪感と決別するためにも、不妊手術を受けることは
私の人生にとって不可欠です。ピルに比べて確実性の高い避妊法ですし、
服用管理や通院の負担が軽い点でも精神的な負担が軽くなり安心もで
きます。人生には後悔がつきものですが、重要な決断を自ら下したから
こそ、その結果に対して責任を負うことができますし、その決断は尊重
されるべきだと思います。熟慮のうえで下した決断とそれに伴う責任を
全うする機会を奪われることは、人生にとって計り知れない損失です。
「後悔するからやめたほうがいい」といってあたかも権利を守ってあげ
ているかのような言い分は受け入れられません。

男女の扱いの差にも憤りを覚えています。男性は比較的自由に不妊手
術を受けられるのに対し、女性の不妊手術だけが厳しく制限されている
現状には納得がいきません。社会において「子どもを産まない女性」が
想定外であることの表れだと受け止めています。

3 配偶者からの同意を求める仕組みについても同じです。日常生活では
食事や運動などを誰の許可もなく自分で決められるのに、より重大な身
体に関わる決定については一人でできないとされるのはおかしいと思

います。私の性や身体が誰かの所有物であるかのように扱われているという感覚に陥りますし、結婚して配偶者がいなければ重大な決定ができない、つまり「一人の大人としての決定権がない」と宣告されているかのように思えるからです。私には配偶者はいませんが、病院で必ず配偶者の有無を確認されなければならないことは負担に感じますし、このルールの存在自体が大きな心理的圧迫となっており、不妊手術を受けることに抵抗を感じさせる原因になっていると感じます。

以 上